

日本語教育における「男性語／女性語」の扱い

鈴木千寿

キーワード 日本語教科書、男性語／女性語、規範、実態、連続体

1. はじめに

言葉の「中性化」⁽¹⁾が指摘されて久しい。大石（1957）の調査をはじめ、国立国語研究所の調査（1974）、NHKの世論調査（1979・1986・1988）等でもたびたび報告されているし、実態調査においても、具体的な言語表現の「中性化」が指摘されている⁽²⁾。

それにも関わらず、日本語教科書では、実際には使わない「男性語／女性語」を取り上げていると感じてきた。これは、筆者のみならず、他の院生や日本語教育に携わる友人たちも同様の印象をもっている。

しかしながら、それは「実態」と「規範」を混同してしまっているのではないかという考えに至った。つまり、日本語教科書で取り上げているのは、教科書というものの性質上、「男性語／女性語」の「規範」であるのに、実際に使用している言葉（「実態」）であると思いこんでいたことが、そういう印象をもった原因だったのではないかと考えたのである。この「規範」と「実態」については後に述べる。

本稿では、それではなぜ日本語教科書の「男性語／女性語」を「実態」であると考えるに至ったのかを、教科書の中の「会話」⁽³⁾に関する記述を見て明らかにしたい。そして、「会話」の使用法や「男性語／女性語」として取り上げられている提示内容を検証して問題点を指摘し、これから日本語教育において「男性語／女性語」をどう扱うべきか検討したい。

⁽¹⁾ 本稿では、インフォーマルな場面において男性が女性語を、また女性が男性語を使用することにより、男性の話す言葉と女性の話す言葉が類似したものになってきているという現象を指して「中性化」ということにする。

⁽²⁾ F.C.パン編（1981）、川口（1987）、吉岡（1994）、遠藤・尾崎ら現代日本語研究会の調査（1989・1990・1994・1995・1997）等。

⁽³⁾ 本稿では、“Dialogue”、“Model Conversation”、「会話文」などのタイトルがついているものを総じて、「会話」ということにする。

2. 「実態」と「規範」に関する先行研究

鷲（1996：44）は、「現代日本語という場合、指示示す意味は二つある。規範としての日本語と地域言語としての東京語である。従って、現代日本語に性差があるという場合にも二つの意味があることになる。東京語の性差と規範としての日本語の中の性差である。さらに東京語の性差という場合、規範としての東京語の性差か、性差の実態なのかを区別する必要がある」と述べている。「規範としての日本語の性差」と「規範としての東京語の性差」が一体どの程度異なるものであるのかは疑問だが、これは本稿の目的ではないのでこれ以上はふれない。

佐竹（1998：53）は、「女の、あるいは、男のことばづかい・話しかたはこういうものだ、こうあるべきだという規範意識」のことを『『女ことば／男ことば』規範』とよんでいる。その『『女ことば／男ことば』規範』が、現実の使用・不使用に関わらずはっきりと意識されている例として、関西圏出身の大学生（年齢18歳～24歳：女72人／男89人）に対する調査の結果を示しており、女／男だけが使う言葉や表現にはどのようなものがあるかという設問に、普段実際に使うかを問われれば使わない表現をあげていることを指摘している。

本稿ではこれらに基づき、「規範」を、概念上こういうものだ、こうあるべきだという規範としての日本語という意味で使用する。また、「実態」を東京方言として実際に使用されている言葉の実態という意味で使用する。

3. 調査

3.1 調査対象とした日本語教科書

教科書は、「男性語／女性語」を項目として扱っているものや、言葉の使用的男女別を明示しているもので、比較的多くの機関で使用されているものを中心に、任意に選択した。

対象としたのは以下の6冊の教科書で、初めの4冊は初級向け、との2冊は中級向けである。

- ・ *An Introduction to Modern Japanese* (1977) *以下「M J」と記す
- ・ 『A COURSE IN MODERN JAPANESE (VOLUME TWO)』 (1983)
- *以下「CM J」と記す
- ・ 『新日本語の基礎 I』 (1990) *以下「しんきそ」と記す

- ・『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE (VOLUME THREE : NOTES)』(1992) *以下「S F J」と記す
- ・『総合 日本語中級』(1987) *以下「中級」と記す
- ・『なめらか日本語会話』(1997) *以下「なめらか」と記す

3.2 「会話」に用いられている言葉について

3.2.1 各教科書の記述

「M J」：“Dialogues”は、東京の職場や家庭や路上等で耳にする現実の会話に基づいていること、そして、会話は日常会話の自然な流れから取り出したものであることが述べられている。

HOW TO USE THIS BOOK

Dialogues (p.ii)

The dialogues in this book are based on actual conversations heard in the offices, homes, and streets of Tokyo. Although those conversations may be more complex, the conversations introduced here are portions taken from the natural flow of everyday conversation.

「C M J」：“DIALOGUE”がどのような言葉で作成されたかについては、特に言及されていない。

「しんきそ」：“しんきそ”的『本冊』には、「会話」について、以下のように記述されている。

改訂にあたって

3. 研修生及び、技術研修先の会社や工場の方々の協力を仰いで、研修生が来日してから帰国するまでの言語活動を調査した。この中から、研修生が日本語を使用する場面、状況などを選び、「会話」に反映させた。「会話」は簡潔な表現で、しかも実用性が高く、自然な日本語であることに留意した。

しかし、『新教師用指導書』には、以下のような記述も見られる。

第一部 新日本語の基礎 I 一教科書の使い方一

III 教科書の説明及び使い方

1. 文型・例文・会話 (4) 会話について (p.12)

「基礎 I」では文の骨格（主語、述語、補語）をしっかりと定着させる意図が会話においても強調されたが、「新基礎 I」では、自然な会話のやり取りも重視された。そのために、会話中によく現われる「語の省略、文（語）の繰り返し、倒置文、さらに（あ、あのう、わあ）などの言葉」が使われている。

とはいっても初級用の会話であるから、日本人同士が普通に話す自然さからは違いものであることはいうまでもない。この段階で、それを目標にすることは不適切でさえある。また、暗記可能な長さにするために実際にはもっと発話されるであろう文も、話の流れに直接関係ないものは省いてある。

「S F J」： “Model Conversation” は、できる限り自然な日本語で書かれていることが述べられている。

How to Use This Book

Textbook: I . Model Conversation (p. (7))

The Model Conversations are written in as "natural" Japanese as possible, the characters use formal expressions as their seniors or strangers at the beginning and gradually start to use casual expressions as their psychological distance diminishes.

「中級」： “STRUCTURE OF EACH LESSON” に、“Dialogues” が自然な話し言葉であることが述べられている。

II. STRUCTURE OF EACH LESSON (p.7)

2. Dialogues

Two or three conversations related to the Main Text in a natural, spoken form of Japanese.

「なめらか」： 「対話」がどのような言葉で作成されたかについては、特に言及されていないが、教科書の帯に「自然な日本語を使って普通の会話をしたい そんな思いに答えます。今までの教科書にはなかった『街で聞こえる日常会話』を楽しく勉強しましょう」とある。

3.2.2 「実態」と「規範」の混同の一因

「M J」の“Dialogues”は現実の日常会話に基づいたものであること、「しんきそ」の「会話」は実用性の高い自然な日本語であるよう留意されていることがそれぞれ述べられていた。また、「S F J」「中級」には“natural”という言葉が使われ、「なめらか」の帯には、「街で聞こえる日常会話」を勉強し、自然な日本語を使って普通の会話をしたいという思いに答えると記されていた。

「規範」と「実態」を混同した一因として、これらの「会話」を「現実の」「自然な」といった言葉で記述している点があげられる。この「現実の」「自然な」といった言葉を「実態」と結びつけてしまったのが、筆者一人の短絡的な結びつけでないことは、「なめらか」の「日本語を勉強している人はときどき『教科書で習った日本語と、実際に日本人が話している日本語が違っている』という印象を持つようです」(p.8) という記述からもうかがえる。「しんきそ」のように、『教師用指導書』に「日本人同士が普通に話す自然さからは遠いものであることはいうまでもない」「この段階で、それを目標にすることは不適切でさえある」(p.12) と述べてその編集方針を明らかにしているものもあるが、『教師用指導書』で述べられたのでは、学習者にその意図は伝わらない。学習者には「自然」だと思われるような記述がなされていれば、学習者や教師から、現実の使用、つまり「実態」と異なっているという批判がでるのは当然ではないだろうか。

3.3 「会話」の使用法について

3.3.1 各教科書の記述

「M J」：“Dialogues”は「できるだけ」暗記するように指示されている。

HOW TO USE THIS BOOK

Dialogues (p.ii)

To make the dialogues "come alive", they should be practiced with a teacher or some other partner, memorizing whenever possible. (It is not necessary to memorize the dialogue before going on to the drills; an equally effective method is to return to it for memorization after completing the lesson.)

「CM J」：“INTRODUCTION”では“Dialogues”に関して、わかるまでテープを聞くこと、またそのとき教科書は見ないこと、わかってから教科書を読むこと、そしてその後、一文ずつテープを止めながら、声を出してリピートすることを指示している。

さらに、「理解」だけでは道のりの半分で「使用」できることがゴールであると述べている。しかし、「男性語／女性語」を含む普通体を学習する「LESSON 17」の“NOTES ON CONVERSATIONAL GRAMMER”には、以下のような記述があり、この段階の普通体に関しては、「使用」よりも「理解」が重視されていることがうかがえる。

L.17 NOTES ON CONVERSATIONAL GRAMMAR

II. Informal speech (p.112)

A. University students frequently talk in this way so you must get used to it. However, you are not expected to speak this way while you are learning basic Japanese.

「しんきそ」：以下のように記述されている。

凡例

II. 教科書の内容及び使い方

1. 本冊 3) 本課 3会話

平易な会話であるから、全文暗記することが望ましい。

学習者のみなさんへ

2. 会話の練習を十分にしましょう。

『会話』で場面や状況にふさわしいやり取りのコツを覚えましょう。

3. テープを何度も聞きましょう。

文型練習や会話練習の際は、正しい発音や抑揚などを身につけるために、テープを聞きながら、実際に声を出して練習しましょう。

「S F J」：会話ドリルに入る前に、“Model Conversation” のテープを予習として何回か聞くこと、そして、与えられた場面でどのようなコミュニケーションの手続きがとられているかを理解することが指示されている。

How to Use This Book

Textbook: I . Model Conversation (p. (7))

You should listen to the Model Conversations several times and try to understand the kind of communication procedure that is possible in a given situation. This will enable you to remember the Model Conversations when you encounter a similar situation.

「中級」：“Dialogues”と、その中から抜粋した表現を練習する“Discourse Practices”に関しては、読むこと、繰り返し練習すること、また、自分でそれを録音して聞いてみるとこと、それを使って会話してみることなどが指示されている。

IV. METHOD OF STUDY (p.7)

- 2) Read the Main Text and Dialogues, . . .
- 4) Go over the Structure and Discourse Practices with a friend.
- 5) Record and listen to your oral production of the material.
- 6) Try to have a conversation on the Main Text essay — or on whatever subject you please — using the forms and patterns introduced in the Structure and Discourse Practice.

「なめらか」：これは比較的新しい教科書であり、「前書き」(pp.3-4) で述べられていることは、日本語教育の現場に即したものであると感じる。そこには、「(くだけた会話のルールを) 使う使わないは別としても、少なくとも聞いて理解できる段階に達してほしい」と、「あなたはこんな所で、何をしているのですか」と「何してんの？こんなところで」のギャップを埋め、自然な発話を聞き取れるようになることが第一段階で、対人関係に合わせて、適切な対話ができるようになることが「究極的な目標」であることが述べられている。「対話」に関しては以下のようない記述がある。

構成と使い方

- ・話し言葉を学ぶための副教材としての使用例 (p.7)

*用例 対話の用例を默読、または音読。教室で使用する場合は、教師による音声モデルをよく聞く。学習者は音声面に注意しながら発話をみる。

*音声テープ

- ・テープに吹き込まれた対話を目で確認してみる。
- ・テープに吹き込まれた対話のロールプレイをする。

初めは与えられた対話に忠実に、次に一部を自由に変化させて、さらには、与えられた状況の中で自由に対話をう。

3.3.2 「会話」の使用法の問題点—「男性語／女性語」を含む場合

「CMJ」では普通体を学習する課で、「使用」よりも「理解」を重視することが述べられていた。「SFJ」の“Model Conversation”は、全編とおして「使用」よりもむしろ、「理解」に重点が置かれていた。しかし、「MJ」「しんきそ」では、暗記することが望ましいとされており、「中級」では、音読に使用すること、また、「なめらか」は、「前書き」では理解が第一段階で使用は「究極的な目標」であることが述べられていたが、「用例」は、音読を中心に使用するよう指示されていた。

音読や暗記という「使用」のための練習それ自体に問題があるというのではない。実際の会話とは違って多少不自然でも、省略のない完全な文を音読、暗記することは、それなりに意味のあることだと考えられる。しかし、「男性語／女性語」に関しても、文法事項を学習するのと同様に音読すること、ましてや暗記することが必要であろうか。「男性語／女性語」や「敬語」などは、使用しないことによって「男性らしくない／女性らしくない」「失礼だ」などの印象を与えることはあるだろうが、使用しないことが「間違い」ではない。これら社会言語学的な事項を、文法事項と同様に練習することは、学習者に使用しなければ間違いであるかのように受け取られかねず、問題であると考えられる。

3.4 「男性語／女性語」について

3.4.1 各教科書の提示内容

「MJ」：「男性語／女性語」に関しては、Lesson 13で“some differences between men & women in familiar speech”、Lesson 14で“more about familiar speech”として取り上げられる。Lesson 13の“Dialogue”で、二人の友人同士の男性の会話が、また、“Explanation”で男性と女性の言葉の違いを表したものとともに、女性同士の“Dialogue”が提示されている。(以下のひらがな部分は、本文ではローマ字。p.151)

	Men usually say	Women usually say
1. (vocabulary)	ぼく きみ うん	わたし or あたし あなた ええ
2. (verb forms)	いこうよ	いきましょうよ
3. (sentence ending)	いいよ、いいね よかったよ、よかったね	いいわよ、いいわね よかったわよ、よかったわね

いくよ、いくね	いくわよ、いくわね
いかないよ、いかないね	いかないわよ、いかないわね
そうだよ、そうだね	そうよ、そうね
そうだ、そうだった	そうだわ、そうだったわ
あしただよ、あしただね	あしたよ、あしたね

Lesson 14でも、おおむねこの表にそって説明されている。この他、「いるの」を男性は「いるんだ」と言うことが付加されている。

「CMJ」：「男性語／女性語」に関しては、LESSON17とLESSON20で“Informal speech”が導入されるときに、“NOTES ON CONVERSATIONAL GRAMMAR”で取り上げられる。

LESSON17では、女性は男性よりも「です」を省略しがちであること、そのため、女性は「のですか」が「の」に変わること、また、男性は「です」の代わりに「だ」を使うことが述べられている。

LESSON20では、女性が「わ」と「かしら」を使用することを述べている。

“DIALOGUE”では、上記であげたことに加えて、普通体に「よ」や「ね」の付いた形の使用（男性）、女性が「かしら」を使用しているところでの「かな」の使用（男性）などが見られる。

「しんきそ」：やはり、第20課で初めて普通体が導入されるときに取り上げられる。『本冊』には男性同士の「会話」が掲載されており、『文法解説書 英語版』には、“male language”と“female language”的説明とともに、女性同士の会話例もあげられている。

第20課 会話 (p.163 前半及びルビ省略)

田中：あ、林君。 あしたの 晩 暇？

林：うん、暇だよ。 どうして？

田中：パーティーに 行かない？

林：いいね。 場所は どこ？

田中：富士ホテル。6時ごろ ホテルの ロビーで 待って いるよ。

林：わかった。 じゃ、また あした。

5. Male language and female language (p.49 本文ローマ字)

鈴木：木村さん、あしたの 晩 暇？

木村：うん、暇よ。どうして？
 鈴木：パーティーに 行かない？
 木村：いいわね。場所は どこ？
 鈴木：富士ホテル。6時ごろ ホテルの ロビーで 待って いるわ。
 木村：わかったわ。じゃ、また あした。

これを比べると、「暇だよ」と「暇よ」にみられる「だ」の省略、「いいね」と「いいわね」、「わかった」と「わかったわ」にみられる「わ」の挿入・付加、「いるよ」と「いるわ」にみられる「よ」から「わ」への変化が、女性同士の会話の特徴としてあげられている。

「S F J」：各課の内容をまとめた「まとめ5」「まとめ6」の〈Additional Information〉に、“Male and female speech”が一つの項目として説明されている。「まとめ6」には、「まとめ5」の内容も含むかたちで網羅的に述べられている。

「まとめ6」〈Additional Information〉(pp.245-247)

2. Male and female speech (2)

In casual speech, men and women tend to use some different expressions, especially in situations when they feel that they should sound typically male or female; . . .

1. Ending particles

- 1) Women tend to omit だ before ね／よ.
*一部を除いて例は省略する
- 2) Women tend to add わ to a statement.
- 3) Men tend to use な instead of ね.
- 4) Women tend to use かしら instead of かな.
- 5) Men tend to add か or かい to a question.

2. Sentence endings

- 1) Men tend to use the imperative form instead of [V (base)] なさい or [V-nai] で.
- 2) Men sometimes make a request with [V-te] くれ.
- 3) Women tend to use ～の instead of ～んだ.
- 1-1 A: どうしたんだ。♂ B: 頭が痛いんだ。♂
- 2-2 A: どうしたの。⁽⁴⁾ B: 頭が痛いの。♀
- 4) Women tend to use ～でしょう instead of ～だろう.

3. Words

Men tend to use some different words in casual speech:

私→おれ／ぼく ごはん→めし 食べる→くう

この他随所に、特に“spoken by male” “spoken by female” の区別を示したい箇所には、男性と女性のマークが表示されている。これがこの教科書の特徴の一つとなっており、これまで見てきた他の教科書には見られなかったものである。

「中級」：一つの課に二つから三つ、全12課で31の「会話文（Dialogues）」があり、全編通して、「会話文」の話し手が、女（女性）、男（男性）、おばあちゃん（さん）、女子大生、男子学生、夫、妻、男性医師、女性患者など、性別がわかるように設定されている。

これらのうち、丁寧体の会話が¹³13、普通体の会話が¹⁶16で、あと2つは1人が丁寧体1人が普通体で話している。丁寧体同士の13の会話を除く18の「会話文」と該当の「ディスコース練習」を見ると、おおむね、これまで見てきた初級教科書で取り上げられている「男性語／女性語」の範囲で会話が作られていることがわかる。当てはまらない点としては、「女子学生」の発話に「いやだなあ」(p.71) が使用されている点と、「おばあちゃん」(p.51) の「だね（え）」「かい」、「おばあさん」(p.89) の「だね」「だよ」「だろう？」など、高齢と思われる女性の発話には、男性が使うと指摘された表現が使用されている点があげられる。

「の」で終わる疑問文は、「CMJ」では「女性的」、「SFJ」では「中性的」ととらえられており、搖れが見られた。この教科書では全て真偽疑問文の例で、しかも「会社の同僚」「夫と妻」「会社の先輩から後輩へ」の会話であるので「のか？」の使用が可能であるにも関わらず、男性の発話にも「の？」が使用されており (p.50、p.70、p.88、p.128)、「中性的」ととらえていると考えられる。

また、初級教科書で扱われていなかったものとしては、「男性（男）」(p.30、p.50) の発話に終助詞の「さ」が現われる点と、「ディスコース練習

⁽⁴⁾ 「SFJ」では、次の「頭が痛いの」という、全体が平叙文である「の」が付いた文には“spoken by female” を表すマーク（♀）が付いているが、この疑問文に「の」が付いた「どうしたの」にはそれがなく、「中性的」であることを示している。前述の「CMJ」では「～のですか」が「～の」に変わるのは「女性的」とされており、搖れが見られる。

(Discourse Practice)」(p.119) で取り上げられている「な」と「わ」の使用があげられる。これによると、不満を表明するとき、男性が「いやだな」と言うところを、「女性的表現」では「いやだわ」と言うことが述べられている。

「なめらか」：まず、「構成と使い方」で以下のように説明されている。

構成と使い方

- ・対話に登場する人物について (p.6)

くだけた会話では、性や年齢によって違った言葉を用いることが多い。用例や練習問題の中では登場人物の性と年齢を次のように区別している。

A／B 男性、女性の区別なし

男A／B 一般的の男性

男C／D 中年以上の男性

女A／B 一般的の女性

女C／D 中年以上の女性

ただし、社会的役割が明確な場合には、それを書き記している。

各課を構成する「学習項目の提示」「項目を含んだ対話の用例」「練習問題」「聞き取り練習問題」の、対話の形式になっているもの全てにおいて、上記のような区別が記されている。「中級」でも「女子大生」「おばあさん」など具体的な設定となっていたが、こういった世代差を考慮したと思われる設定は、初級の教科書には見られなかったものである。

初級教科書で指摘された傾向に当てはまらない例（「ね／よ」の前に「わ」を付加しない p.18、p.72、「かしら」ではなく「かな」を使用する p.72、p.142、「だ」を省略しない p.109、など）は、「女A／B」「女子学生」など、比較的若い女性の発話に見られる。また、「中級」同様、ここでも「女C（おばあさん）」「祖母」(p.44、p.67、p.86) が男性の使用傾向が指摘されている表現を用いている。そして、女性（「妻」）に「住みたいなあ」(p.74) という「な」の使用が見られるのも「中級」同様である。

初級教科書では扱われなかったものを見ていくと、「男A／B」「父」の「ぞ」「ぜ」の使用 (p.23、p.67、p.120)、「男A／B」が使用した「だい？」(p.58)、間投用法の「ね／な／さ」(pp.103-106) などがあげられる。「ね／な／さ」に関しては、「『ね』は男女ともに使うが、『な』は主に男性が使う。『さ』は男女ともによく使うが、全国的ではない」(p.103) と述べられている。

3.4.2 教科書における「男性語／女性語」の問題点

初級の教科書4冊全てに取り上げられているのは、女性の「わ」の使用と「だ」の省略（または「だわ」の使用）である。これらは尾崎（1997）が、「実態」としては全体的に使用が少なくなっていることを指摘しているものである。これ以外でも、初級の教科書は総じて「男性語」と「女性語」を二項対立的に提示しており、教科書における「男性語／女性語」は「規範」であるととらえても、この二項対立的な提示のしかたには問題があると考えられる。中級向けになり世代差が取り入れられると、若い女性や高齢の女性に多少「男性語」を使用する例も見られる。しかし、特に「高齢の女性の男性語使用」に関しては、日本人の「規範」であるかどうかにも疑問が残るところである。「一般の男性／女性」と「中年以上の男性／女性」を別の記号にして表すなど、随所にそれまでの教科書とは違った特徴を見出せる「なめらか」においても、いまだ「わ」の使用や「だ」の省略、「ぞ」「ぜ」等の使用に終始しているという印象は残る。

4. 日本語教育における「男性語／女性語」

4.1 「男性語／女性語」を教える必要性

本稿ではまず、「男性語／女性語」を日本語教育で教える必要があるのかという問題に関して、その必要があるという立場をとる。日本語学習者は、本人の意図ではないにもかかわらず、従来「男性語／女性語」とされてきた表現を多用して、必要以上に「男らしい／女らしい」という印象を与えたり、女性の学習者が実際に耳にした日本人の女性の話し方をそのまま真似て「男っぽい」とか「ぞんざいだ」という印象を与えたりする可能性があると考えられるからである。HIDASI（1994）も「女性の言葉遣いを教える必要性」として、次の3点を挙げている。

1. 成人社会では、いまだに女性と男性の言葉遣いが異なっているので、「中性化」にはまだ数十年かかるという点
2. 外国人に対して、日本人はより上品な言葉遣いをするため、「より中性的な」言葉を使う女性も、女性の言葉に切りかえる傾向をもつ点
3. 日本社会は、誤用のうち言葉遣いの誤りに最も批判的で、文法的過ちはに寛容だが、「使用域一選択」および文体的誤用には厳しい点

日本語母語話者の場合は、各人の「規範」に基づいて、どのような表現を使用するとどのように見なされるかということを承知の上で、つまり意図的に使

い分けていることが多い。それが日本語学習者と大きく異なる点であると考えられるので、「規範」を一つの知識として教えることは、やはり必要ではないだろうか。

4.2 日本語教育における「男性語／女性語」

本稿では、日本語教科書の「会話」に関する記述が、「規範」である「会話」を「実態」であると思わせる一因であると考えた。教科書である以上、必ずしも「会話」が「自然な」または「現実の」ものである必要はなく、「規範」であるのはむしろ、当然とも言えるのではないだろうか。これには現場の教師が、教科書は「規範」であり「実態」とは異なるものであるという認識をもつこと、つまり「自然な」「現実の」という言葉を、自らも「実態」に結びつけず、また、学習者にも結びつけさせないようにすることが重要であると考えられる。

次に、特に「男性語／女性語」に関しては、「規範」である「会話」を、「理解」にとどまらず「使用」するものとして練習することを指示している点が問題であると考えた。「男性語／女性語」に関しては、初級段階では特に、「CMJ」や「SFJ」のように「理解」にとどめ「使用」を迫らないという立場をとることが必要ではないだろうか。辞書や教科書で「男性語／女性語」が日本語の特徴のように記述されると、日本語教育でもどうしても「女性はこういう女性語を使います」のように教えがちである。あるいは、「実態」は「中性化」が進んでいるため、従来からの「女性語」は使っていないという印象を受け、「教科書にはこのように書いてありますが、実際は使いません」と教えるかもしれない。しかし、本当に誰も使っていないのだろうか。使っているのは「ごく一部」ではあるかもしれないが、「使わない」と言うことはできないと思われるし、学習者がその「ごく一部」の人とコミュニケーションしないという保証もない。現状のままでは、「使う」と教えるのも「使わない」と教えるのも、納得のいく方法ではないと考えられる。「理解」にとどめるなどを明記するよう、今後教科書を改訂していくことももちろん必要であろうが、当面は現場の教師が、使う使わないは学習者の選択に任せることの姿勢をとることが重要であると考える。ただし、使う使わないという選択の参考になる情報（つまり「男性語／女性語」に関する「規範」）は十分与えなければならぬであろう。

最後に、「男性語／女性語」が二項対立的に扱われている点について考えてみたい。「男性語／女性語」は「連続体」である。社会言語学者であるJorden (1987: 228) の教科書でも、どちらか片方の性だけが使用するような表現は極少数であること、過去にはそういったものもあったが、現在ほとんどの日本人は時と場合により、より広範囲のスタイルで話すことが述べられており、それ

は「とても男性的」から「とても女性的」まで続く「連続体」("the masculine-feminine continuum")であるとみなされている。中級の教科書で世代差が取り入れられたのは画期的であったが、こと「男性語／女性語」に関しては、世代差というより、全ての世代の男性も女性も、「連続体」の中のある部分を時と場合によって使い分けていると考えた方がよいのではないだろうか。

「男性語／女性語」を使用する場面に関しては、「S F J」の「まとめ 6」に “especially in situations when they feel that they should sound typically male or female” (p.245) という記述があるのみである。「連続体」であることを提示することにより、それ以外の場面ではどういった選択をするのかを示すことができるだろう。「男性語／女性語」が「男性／女性が使用する語」であるというとらえ方より、「連続体」の両端付近に位置する語が、「男性であること／女性であること／強調する表現」であるというとらえ方の方が適切であると考える。あえて強調したくない人は使わず、より中性的なものを使えばよい、といった性質のものであるだろう。

女性の服装でも、スカートが多く女性的な女性と見られている人、ジーンズが多くどちらかといえば男性的と見られている人など様々だが、多くは時や場所や場合によって着ていくものを変えるし、また見られ方も変わる。男性も徐々にではあるがその選択の自由が見受けられるようになってきている。言葉もそれでよいのではないか。学習者は、自分がその場面でどう見られたいかによって、言葉を選択すればよいのではないだろうか。日本語母語話者は、女性でも意図的に男性的表現を使用することがあるし、また、意図的に女性的表現を使用することもある。男性だが過度に「男らしい」と思われたくない人、女性だが「男っぽい」と思われても差し支えないと思っている人、また聞き手側、つまり判断・評価をする側のときも、男は男らしく女は女らしくと考えている人、そうでなくてもよいと感じている人など、それぞれがそれぞれの選択をしている。

5. おわりに

「男性語／女性語」という「連続体」に、どのような言語項目がどのように位置するのかに関しては、さらなる研究が必要である。

また、これまで述べてきたように、初級の段階での「男性語／女性語」は、「理解」を重視し「使用」は必ずしも迫らないとするのも一つの方法と考えられるが、さらに、「連続体」の中程に位置する、男女共に使用する表現を効果

的に用いて、男女共に練習できるような「会話」を作成することも有効ではないかと思われる。

これらに関しては、今後の課題としたい。

付記：本稿は修士論文の一部を修正、加筆したものである。

参考文献

- 石野博史（1980）「世論調査にみることばの男女差」『月刊ことば』第4巻第4号 英潮社
- 遠藤織枝（1990）「女らしい日本語を教えるべきか」『月刊日本語』第3巻第2号 アルク
- 遠藤織枝・小林美恵子・卓星淑・丸山和歌子（1989）「女性の話しことば」『ことば』10号 現代日本語研究会
- 遠藤織枝・片桐須美子・桑原文代・小林美恵子・韓先熙・丸山和歌子（1990）「男性の話しことば」『ことば』11号 現代日本語研究会
- 大石初太郎（1957）「女ことばはどう変わるか—ことばについての女子大生の考え方」『言語生活』65号
- 尾崎喜光（1997）「女性専用の文末形式のいま」『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 川口容子（1987）「まじり合う男女のことば—実態調査による現状」『言語生活』429号
- 佐竹久仁子（1998）「『女ことば／男ことば』規範をめぐって」『ことば』19号 現代日本語研究会
- 中島悦子（1994）「女性のことばと文末の言語形式」『ことば』15号 現代日本語研究会
- （1995）「文末表現—依頼要求表現と丁寧度の要因」『ことば』16号 現代日本語研究会
- 中村桃子（1995）『ことばとフェミニズム』勁草書房
- 最上勝也（1986）「働く女性のことばの意識」『N H K放送研究と調査』第36巻第11号 日本放送出版協会
- （1988）「『女性の時代』のことば意識—全国オムニバス調査から」『N H K放送研究と調査』第38巻第12号 日本放送出版協会
- 吉岡泰夫（1994）「若い女性の言語行動」『日本語学』第13巻第11号 明治書院

- 鷲留美（1996）「現代日本語の性差についての一考察－女ことばとしての終助詞『わ』を巡って－」『日本語・日本文化研究』第6号 大阪外国语大学日本語講座
- F.C.パン編（1981）『日本語の男女差』東西手話学会
- HIDASI, Judit (1994) 「外国における日本語教育の立場から見た『日本語と女』の問題点」『ことば』15号 現代日本語研究会
- Jorden, Eleanor Harz. 1987. *Japanese; The Spoken Language PART 1*.Kodansha International.

使用した教科書

- 海外技術者研修協会編（1990）『新日本語の基礎 I 《本冊 漢字かなまじり版》』スリーエーネットワーク
- (1992) 『新日本語の基礎 I 《文法解説書英語版》』スリーエーネットワーク
- (1992) 『新日本語の基礎 I 教師用指導書』スリーエーネットワーク
- 筑波ランゲージグループ編（1991）『SITUATIONAL FUNKTIONAL JAPANESE vol.3』凡人社
- 富阪容子（1997）『なめらか日本語会話』アルク
- 名古屋大学総合言語センター日本語学科編（1983）『A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME TWO』名古屋大学出版会
- 水谷信子著・アルク編（1987）『総合 日本語中級』凡人社
- Mizutani, Osamu. and Nobuko Mizutani. 1977. *An Introduction to Modern Japanese*. The Japan Times